

二年生になって掛け算を習いはじめた。ただし、二年生でやるのは四の段くらいまでで、完全に十二（九ではない）の段まで終わるのが四年生の頃である。日本の徹底した集中訓練を思う時、何とゆつたりと構えた教育だろうと驚く。

息子は品行方正、成績まあまあで、三年生になった。三年生になってから、フランス語の授業が始まった。教、色など簡単に、子供の興味を引くものから少しずつ指導する。初めて習ってきた文章がメアリー・ド・アリー（メアリーはねむる）というのである。子供が眠そうな顔をしていたから、そんな文を習ったのかも知れない。次に覚えたのがママ・ウーブラ・ラポルトウ。息子の説明によると、ウーブラというのは戸を開けて家の中に入ることだという。子供の見た映画では、母親が戸を開けて家の中に入った場面だったのだろう。フランス語を知らない私は、息子の説明をうのみにした。たまたまミルクの Karton を開けようとしたら、ONZ、BAR という字が目に入った。音に出してみると、どうも息子の言うウーブラらしい。英語の指示を見ると open とある。（ポルトウというのは戸のことだから、「ママ・ウーブラ・ラポルトウ」は、「ママ、戸をあけて」の意味）。進んだオーディオ・ビジュアルの機械があるので、教科書を使わないで教えるのが小学校では普通らしい。利点もあるが、このように曖昧なことが起り易いので、子供にも教科書を与え、耳からだけではなく、正しい綴りと意味を同時に教えた方がいいように思う。

フィールド・トリップ

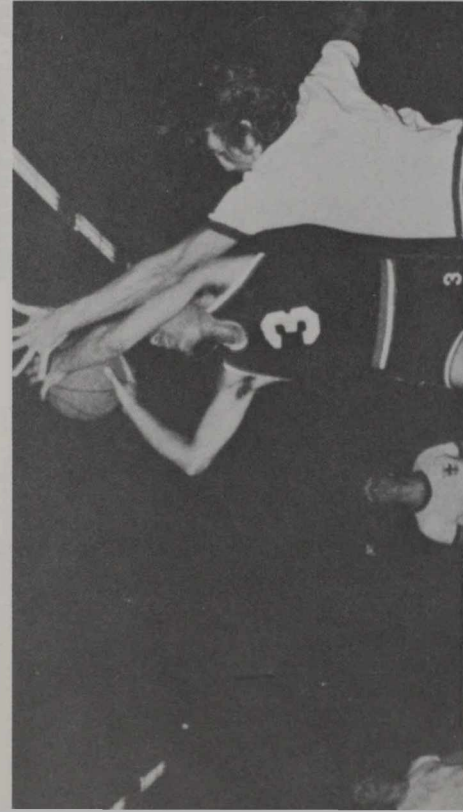
長かった暗い雨期を吹き飛ばすように、四月になると桃、梨、りんご、桜などがいっぺんに咲き乱れ、心が浮き立ってくる。そして、五月、ビクトリア女王誕生日の頃、運動会がある。これも、日本のと比較にならない程、先生も生徒も気を楽にしてやる。予行練習などしたら、スリルも面白味も減ってしまうとはかりに、ぶっつけ本番。それで結構、子供の親の歓声上がる。三年の時の運動会は一時間近く早く終わってしまった。どうしたのかと思つたら、前年の時間オーバーの失敗をくり返すまいと先生方が工夫した結果、うまく行き過ぎたとのことである。

一学期に二、三回フィールド・トリップというのがある。これはスケート、水泳の練習、動物園、博物館、美術館の見学などである。こういう時、親は車で、三、四人ずつ子供達を目的地まで送ったり、迎えに行ったりして、学校に協力する。たまに、バスで一日遠出することもあるが、費用は子供一人二十五セントくらいで済む。高学年のフィールド・トリップともなると、山に登ったり、キャンプしながら地形を調べ、昆虫や植物を観察し、クラスで習ったことと結びつけた研究目的をもって出かける。

父兄は、そのほかにも色々と学校に協力している。例えば、今度、学校に遊び場が作られたが、その費用を集めるのに、古新聞を集めたり、バザーなどを何回か催したりした。お陰で、立派なのが出来る。この遊び場に子供達の姿が見えない日はない。その外、少し遅れた子供の読み書

きの手助けやら、昼休みの体育館監督、運動会などの催し物のある時は売店の仕事、一学期に一度出る学校だよりの編集など、積極的に奉仕している。

六月の末で三学期も終わり、二か月の夏休みに入る。宿題などない子供達は、体をもて余し、親の悩みの種となる。そこで、大抵キャンプに出したり、地区のコミュニティー・センターで行う会、焼物、ダンス、音楽、演劇、スポーツ等のグループに参加させたり、旅行に連れて行ったりする。子供達は九月の新学期には、元気はつらつと、新たな気分で学校に戻る。第一日を終えて帰ってくる子供達の会話は日本と同じ。「きみの担任はだれ」「きみのクラスにジョンがいるの」等、新しいクラスについて情報を交換し合う。



二学年編成

息子が四年になった時、ホームクラスには五年生がほとんどで、四年生は六人だけ。あまり学年に関係のない科目は五年生と一緒に勉強する。算数、国語などは分かれるらしい。しかし、社会など少し内容の程度を落としても勉強方法は五年生と同じで、二年の時と大部違う。息子は少しとまどつたようだ。

クラスに異なる学年を入れることにより、教師と生徒の比が良くなる。子供たちの人数は、学年によって多かつたり少なかつたりするが、一人の教師が担任する生徒数には限度がある。二学年編成にすれば、これが調整できる。また、自分で作業の出来る子、出来ない子、という風に生徒を分けることによって、一人の

